

---

# 方向音痴

夕焼け

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

方向音痴

### 【Nコード】

N8089H

### 【作者名】

夕焼け

### 【あらすじ】

西ってどっちですか？お箸を持つ手のほうですか？

なんとなく、こう、あまのじゃくといえますか、人が右に流れてるようなら左に向かって進みたくなる性格といえますか、まあそんなぐあいに。

「あ、今ちょっと人の道から外れてるわたしちょっとかっこいいかも shouldn't」的な自意識過剰さもほどほどに撒き散らし気味なアレで。

ここはもちろん「小説」を投稿する場所で、見る人もやっぱり小説的なあれこれを読みたくてここを見てるわけで、やっぱりもつとこう、ちゃんとした小説っぽいお話を書いた方がいいのかな、とも思う。

思うよ。

思うから。

するべき事と逆のことをしたくなるのが人っていうもので。

だからやっぱりこういう場に載せる「文章」としてセーフなのか、アウトなのかよくわかんない感じの事をだだ漏れっぽい感じのあれで垂れ流してこうかななんてね、思ったりね。

例えば、方向音痴。

わたしはちょっとこう、優れた方向知覚能力にあまり恵まれなかったといえますか、

まあいわゆる地図を見ながら「確かにここ右でいいはず！地図にはそう書いてあるし！」とか確認しながら右に曲がったら地図に載っ

てない得体の知れない場所にひよっこり躍り出ちゃったりなんかしたりして、そうなるともうどきどき動悸がしだして、くらくら眩暈がしだして、焦るからまた余計なところで無駄に曲がったりしてっという、そしたらもうどこをどう進んだら地図上のどこに出るのかもわかんなくなっちゃって、まあ一言で言うとも子になりやすいタイプというか、まあそんな感じのあれで。

もちろんそれっていうのは平面フラットの安い液晶モニターに映し出された3D空間なんかにあってもいかに発揮されちゃったりなんかして。

わたしはわりとよくオンラインゲームをしたりしてて、大抵どのゲームでも、レベル10に到達するより先に、マップの最果てに到達出来ちゃうのはある種の才能なのかなあ、なんてなるべくポジティブな視点で客観的に今ある自分の立ち居地を見てみようと思ったりはするんだけど、

現実問題として拠点の街に帰るまでの道のりはマップで見ただけでも気が遠くなるくらい果てしないし、その途中にいる敵はあまりに強すぎるし多すぎるし怖すぎるし、そもそも何でそんな中をただの一度も死なずに、ただの一度も疑問を抱かずにこんなトコまで来ちゃったのかっていう疑念は尽きないわけで。

「徒歩5分」の場所に5分でたどり着けた事なんて、わたしにはただの一度も無くて。

わたしが30分かけてその場所につく頃、人はみんなすでに25分ぶん、わたしより先の地点に到達してる。

そんな感じで。  
小さい頃からいつだって。

無駄な時間を過ごしすぎて来たなあ、と思ったりする。  
皆が5分で到達できる場所に、毎度毎度30分かかる。  
他の人ならきつともっと有意義な事に「25分」を使う。  
わたしにはそれが出来ない。

「あなたは時間を無駄にしてる」って人からも半ば呆れられながらよく言われてきたし、自分でも「時間無駄にしちゃってるなあ」って半ば呆れながらよく思ってた。

だけど、わたしの思い出の中にあるその場所はいつだって「目的地」なんかじゃなくて。

地図に載ってない、どこだかも分からない交差点、高校の願書をもらいに行く途中の道で迷った時のこと。

駅から15分って、地図には書いてある。

だけでもう2時間も歩いてる。

なのに見つからない。

もう自分がどこにいるのかも分からなくなって、泣きたい気持ちで進んだ先にある名前も無い夕焼けの原っぱで見た、サッカーボールを蹴る子供たちのはしゃぐ声。

オレンジ色の中で、楽しそうな、声。

冬のおいがした。

道をたずねたらわざわざ一緒についてきて案内してくれたおばさんが、その道中話してくれたたちよっとした町の小話。  
その時の、おばさんの笑った顔。

そんな時のことばかり、なぜかよく覚えてる。

たかが願書取りに行くだけでなんでこんなに時間かかるんだ、受験生なのにサボってどっかで道草くってたんだろう！って先生にすごく怒られた。

時間をまた無駄にして、と。

無駄な、時間。

きっと人なら、もっと効率よく、別の事に使える。

だけど、わたしはやっぱりこれでいい。

そんな風に思う。

方向音痴。

だから見れた名も無い場所、だから聞こえた名も無い音。

そういうものでわたしの思い出はいつも溢れかえってる。

そんな思い出たちを、わたしは嫌いじゃない。

わたしがわけの分からない場所でまごまごしてる間に、きっと人は正しい道をどんどん先に行っちゃうけど。

いつだって。

でもそれでいいや、って今はとても素直に思える。

いつか、同じ速度で横を歩く人に出会えたら、と思う。

わたしと同じように、沢山道に迷って、無駄に道草くって、そうやって見てきた景色を、大事な思い出なんて言って語る、世の中の的に見ればちよつとだめな人。

そういう人と、旅を出来たら、と思う。

なんてね。

なにをまたくさい事を、と思う。

でもくさい事を書きたがるのがわたしだから、やっぱり書いてみたりする。

そんな感じで、  
そんな感じで。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8089h/>

---

方向音痴

2010年10月14日03時13分発行